

京くみひも

【産地組合】京くみひも工業協同組合

（産地紹介）

京くみひもの始まりは平安時代と伝えられています。鎌倉時代に入って武具に使うことが増え、実用的なくみひも作りの技術が発達しました。「くみひも」は、掛軸、手箱、茶道具など、茶の湯の調度にとって、欠くことのできないものです。室町時代以降、茶の湯に取り入れられたことで、「くみひも」に「侘び」「寂び」を感じさせる渋い感覚が求められました。茶の湯と出逢うことで、京くみひもは、従来の華やかさとは違うところにある美しさを生み出すことになったのです。



江戸時代になると、名所見物や寺社参りが流行し、沢山の庶民が京都を訪れるようになりました。人々は、京土産として京人形、京扇子、京袋物などを買い求めました。「くみひも」は、それらの土産物の随所に用いられていました。その結果、京土産とともに、京くみひもも全国各地に広まっていきました。

くみひもは千年以上も前から利用されており、神社や寺、衣服、鎧兜、刀の下緒等あらゆるものに使われています。用途に応じた組み方があり、その数は3,500種類にも及んでいます。

明治時代以後は和装小物の帯締めとして使われてきました。京くみひもの帯締めは、着付用品としてだけでなく、美しい装飾品として着物を愛する人たちに大切にされています。京くみひもの帯締めには、たった一本で、着物の装いにまるで違った雰囲気を作り出す、奥の深い魅力があります。